

繊細かつ大胆に描く 水墨画の光と影の風景

「水墨画を描くようになって、今までぼんやりと見ていた景色が、光や影に目を向けるようになって、見え方が変わってきました」と話すのは、藤本賢治さん（緑町区）。

平成17年に村上右近先生の



藤本 賢治さん
Fujimoto Kenji
〔緑町区〕

ふじもと けんじ / 水墨画家。
84歳。2月に町生涯学習センター・ギャラリーモールで水墨画の個展を開催した。本町の老人クラブ連合会会長。

水墨画教室が始まることを知り、「若いころから描いてみたいと思っていた」と、念願だった水墨画を描き始める。現在は熊本県老人会の理事や本町の老人会長などを務め、高齢者福祉に精力的に活動す

る一方、月に2回教室に通い、思いを寄せる風景を描く。小さいころから絵を描くことが好きで、夏休みには三角西港近くの山の上にある公園で、海と島々の間を行き交う船を眺めては、クレヨンで描いていたという。

水墨画では、光の当たり方や影の差し方を、墨の濃淡で表現する。「山に目を向けると、近くの山が濃く、遠くの山は淡く見えます。逆に海では、遠くが濃く見えます。そして波の形はどうなっているか、砂浜の色はどうなっているかというところに目を凝らします」と藤本さん。「木があれば葉のひとつ、花のひとつでも、光が当たっているところ、暗いところがありま」と、風景の隅々にまで目を向ける。

筆に水を含ませて墨を付け線を描くと、筆の毛先ほど濃く、根元ほど淡くなり、一筆で光と影が表現できる。「色を塗り重ねる油絵などとは異なり、一発勝負で失敗ができません。線を描くスピードが必要ですよ」と、筆の運び方の難しさを語る。

「富士山が好きですよ」と言う藤本さんの作品には、さまざまな場所から見える富岳が描かれている。「風景写真などを見て気に入った構図があれば、描きたいと思います」と藤本さん。「伊豆半島から見える富士山がとても眺めがよいんです。湘南や箱根などを旅行して回り、描いてみたいですよ」と想いを馳せる。

広報 こうさ

2018年（平成30年）3月号
通巻584号